横浜市立 西富岡小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 元 ～ 3 年度 ）

重点取組分野	令和　元　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	○社会科・生活科を重点教科として取り上げ、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。①すべての子どもたちが互いに学び合う学習集団②討論などの対話的な学びの重視③問題解決的な学習の重視④学んだことの価値に気付くメタ認知力の育成⑤教科の枠を超えて学びを創る態度の育成	①②年度初めからお互いに聞き合う集団づくりを意識し、日々の学習を展開していった。自分の考えと他者の考えを比べながら、話し合い、思考を深める姿が見られた。③子どもが身近に感じられるように教材との出合わせ方を工夫した。④意図的に学習を振り返る場面を設定し、これまでの学びの内容や方法を見	B
豊かな心	①全教育活動を通して、道徳教育の充実を図る。②たて割り集団活動での各学年のねらいの明確化や内容の充実を図り活動することで、主体性、思いやりの心を育てながら自己有用感を高める。③友達や地域とのつながりを大切にし、自ら進んであいさつができるようにする。	①様々な教科・領域、学校行事に道徳教育を位置づけて計画、遂行することができた。②毎回のたて割り集団活動において、学年に応じたねらいを意識して指導し、子どもたちの自己有用感の向上につながった。③委員会を中心にあいさつ活動を実施した。	B
健やかな体	①西富タイムを各学級ごとに計画的に実施し、体力の向上を図る。 ②縄跳び週間などのスポーツ週間を通し、季節に応じた体力向上の取組を実施する。	①水曜日にロング昼休みを設けクラス遊びを実施した。体力向上と共に、外遊びの習慣作り、児童同士の関係づくりにも繋がった。②体力テストの結果から、反復横跳びの記録を向上させるために「おにごっこ週間」を行った。休み時間には、元気よく遊ぶ姿が見られた。	A
共感的理解	①授業の中で、異なる意見を認め合い、相手の良さを見つけることのできる関係性の育成②児童が自分の役割に責任と自覚をもって取り組むたてわり活動③児童がよりよい学校を目指して自ら活動計画を立て、実践できる児童会活動を行います。	①顔を見て聞く、うなずいたり適切な声を出したりしながら反応を返す等、基本的な聞き方を年間を通して指導してきた。他者の考えを理解しようとしたり、自分の考えと比べたりする姿が見られた。②たてわり活動では学年にあっためあてをもって参加するようにし、異学年が協力して楽しもうとしていた。	B
特別支援教育	①個別の支援計画・指導計画に基づき、子ども一人ひとりの状況に応じた支援体制・学習環境を作り継続的な指導を進める。	①機関連携やソーシャルスキルトレーニングなど研修を行い、職員の合理的配慮への理解を深めた。②交流級担任や他校の個別支援学級担任と綿密に連絡を取り合い、ねらいを明確にしてから近隣小中学校との交流活動や校内での交流活動や共同学習を進めた。	B
安全管理	①発達段階に応じた危機管理教室や防災・防犯訓練、交通安全教室等の体験活動を通して児童の危機管理能力を高める。	①様々な非常変災においても迅速に行動ができるように、避難訓練や不審者対応訓練、防犯教室を実施した。避難訓練では、予告なしの避難訓練、煙体験や消火器体験など状況を変えて訓練を行った。防犯教室では、今年度より高学年で、インターネットでのトラブルについて取り上げ生活に活用できるよう内容	A
地域連携	①開かれた教育課程をめざし、まちと共に歩む学校づくり懇話会を中心として、新しく設定した教育目標を周知、連携の在り方を探る。②学校と地域との情報共有、理解を図る。③学校運営協議会の設立に向けた基盤づくりに取り組む。	①まちと共に歩む懇話会や学校説明会などで新しく設定した学校目標の周知を図った。②低学年の生活科で公園を管理する人たちとの関りや昔遊びなどでの町の先生としての関りなど年間を通じて、繋がりをもった学習づくりを実践できた。	B
保健管理	①学校保健委員会を中心として、児童自らが自分の体に関心をもち、よりよい生活をめざすための啓発活動②日常の保健学習の充実③日常の健康観察や疾病予防、児童の自己健康管理能力向上のための取組	①「清掃活動」を軸としてきれいな学校にして健康に過ごすという目標に向かってクラスごとに活動した。学校薬剤師を招いて専門的な助言を得た。③ 担任を主とした日々の健康観察と共に、養護教諭が各教室を回って疾病の早期発見、及び児童指導に活かしている。	B
いじめへの対応	①児童支援専任を中心に組織として子ども一人ひとりを大切にした児童指導を進める。特に毎月職員会議内で定期的に子どもの情報の共有化を図る。 ②アンケートを活用しながら日頃の児童の見取りを十分にすることでいじめ等の未然防止に努める。	①職員会議で、児童の様子の共有を行うことができた。いじめ防止対策委員会を児童指導専任中心に毎月末に実施した。必要な情報については打合せ等で伝え、職員全体で共有した。②年に2回、いじめアンケートとYPのアンケートを取り、指導に活用した。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①メンターチームを6年以下の教職員を中心に組織する。全体の相談役に主幹教諭、様々な講師にはミドルリーダーがあたり月1回の活動を継続的に行う。 ②職員会議をペーパーレスで行い、事務の効率化を図る。 ③2週に1度教務会を行い、学校リーダーが全体を見通して学校運営に参画していく場を設定する。	①各教科主任から助言を受けながら、授業実践に生きるスキルアップを図ってきた。また、学級経営・学校運営の在り方について深め、若手教員の育成を図った。②電子掲示板を活用し、職員会議でのペーパーレス化を進めることができた。③主幹教諭を中心としたリーダーが企画会に参加し、学校経営意識を高め	B
ブロック内評価後の気付き	・新学習指導要領実施に向け、新しく作成した小中一貫のテーマ「TWO　YOU」(優・・自己にも他者にも思いやりのある子　勇・・・未来を見すえ、一歩踏み出し、表現できる子)で、今年度授業研を行った。5つあったテーマを絞り込むことで、重点化して取り組む事が明確になり、9年間でめざす子どものイメージがもちやすくなったという振り返りがあった。		
学校関係者評価	・旗持活動を10年以上続けているが、明るく元気な様子は変わらない。元気に挨拶ができる子どもが多い。 ・登下校の様子を見ると、登校時に、特に低学年の児童で交通ルールを守れない子どもがいるように思える。町の中でも、「マナー」や「ルール」が守れるとよいと思う。・一人ひとりの子どもたちはとても素直だが、集団になると勝手な行動をとることがあるのではないか。・交通安全という視点からは気になることが何点かある。信号無視をして横断する子どもや一旦停止で止まらない自転車等が気になる。		
中期取組目標振り返り	学習面では自ら問いをもって取り組んでいく学習態度の育成をめざして、組織的な指導体制を構築し取組を続けている。社会科・生活科、生活単元を中心とした重点教科などで、子どもたちの意欲的な学習態度が育ってきている。次年度も引き続き、実態を細かく見つめた上で、周りと関わりながら自ら学ぶ子どもたちをチームで育てていきたい。高学年の子どもたちをリーダーとしたたてわり活動では、初めての全校遠足も実施することができた。ペア学年の取組も含め、計画的にたてわり活動の充実を図っていく中で、子どもたちのコミュニケーション力(あいさつ等)の育成につなげたい。		

重点取組分野	令和　2　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	○社会科・生活科を重点教科として取り上げ、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。①すべての子どもたちが互いに学び合う学習集団②討論などの対話的な学びの重視③問題解決的な学習の重視④学んだことの価値に気付くメタ認知力の育成⑤教科の枠を超えて学びを創る態度の育成	①②話型を各教室に掲示し、対話的に学び合う授業づくりを行った。自分と他者の考えを比べることで、知識が確かなものとなり、思考を深めた。③子どもの気づきや疑問から学習問題を作ることで、主体的に学ぶ姿が見られた。④意図的に学習を振り返ることで、これまでの学びを見直すことができた。	B
豊かな心	①全教育活動を通して、道徳教育の充実を図る。②たて割り集団活動での各学年のねらいの明確化や内容の充実を図り活動することで、主体性、思いやりの心を育てながら自己有用感を高める。③友達や地域とのつながりを大切にし、自ら進んであいさつができるようにする。	①学年の実態に応じて、様々な教科・領域、学校行事に道徳教育を位置づけて計画、遂行することができた。②毎回のたて割り集団活動において、学年に応じたねらいを意識して指導し、子どもたちの自己有用感の向上につながった。③委員会を中心にあいさつ活動を実施した。	B
健やかな体	①西富タイムを各学級ごとに計画的に実施し、体力の向上を図る。 ②縄跳び週間などのスポーツ週間を通し、季節に応じた体力向上の取組を実施する。	①水曜日のロング昼休みの時間に、各学級で計画的に校庭や体育館で体を動かす時間を設け、体力向上につながった。②今年度、スポーツ週間は感染症予防のため実施されなかった。	B
共感的理解	①授業の中で、異なる意見を認め合い、相手の良さを見つけることのできる関係性の育成②児童が自分の役割に責任と自覚をもって取り組むたてわり活動③児童がよりよい学校を目指して自ら活動計画を立て、実践できる児童会活動を行います。	①異なる考えでも、まずは話し手の思いを受け止めた上で、自分の考えを話す姿が多く見られるようになり、進んで意見交流できた。②ありがとうタイムを通して、高学年が計画実行の成就感を味わうことができ、次への意欲に繋がっていた。③児童会目標に向かって活動計画を立てて活動を進める姿が増えた。	A
特別支援教育	①個別の支援計画・指導計画に基づき、子ども一人ひとりの状況に応じた支援体制・学習環境を作り継続的な指導を進める。	①ソーシャルスキルトレーニング等の研修を行い、職員の合理的配慮への理解を深めた。②個別支援学級担任は、交流級担任と綿密に連絡を取り合い、ねらいを明確にしてから交流活動を進めた。③一般学級に在籍する児童を対象に、その児童に応じた特別支援教育を実施した。	B
安全管理	①発達段階に応じた危機管理教室や防災・防犯訓練、交通安全教室等の体験活動を通して児童の危機管理能力を高める。	①避難訓練では、様々な状況下想定で訓練を行い、臨機応変に対応できる危機管理能力が高まった。交通安全教室により、歩き方、防犯教室により放課後の防犯について危機管理能力が高まった。5・6年生はネットについての防犯に取り組み、危機意識を高めることができた。	A
地域連携	①開かれた教育課程をめざし、まちと共に歩む学校づくり懇話会を中心として、新しく設定した教育目標を周知、連携の在り方を探る。②学校と地域との情報共有、理解を図る。③学校運営協議会の設立に向けた基盤づくりに取り組む。	「まち懇」はコロナ禍のため、第1回を中止、第2回を書面開催で行った。地域との大きな繋がりの場が設けられず、連携がとりづらい一年となってしまった。しかしその中で、書面開催への意見や感想には多くの声が寄せられ、共に学校を作っていこうという共通の目標は持ち続けることができた。	B
保健管理	①学校保健委員会を中心として、児童自らが自分の体に関心をもち、よりよい生活をめざすための啓発活動②日常の保健学習の充実③日常の健康観察や疾病予防、児童の自己健康管理能力向上のための取組	①[効果的な手洗い」を軸としてさまざまな感染症対策をして、健康に過ごすという目標に向かった。クラスごとに「手洗いめあて」を決めて活動した。③ 担任を主とした日々の健康観察と共に、養護教諭が各教室を回って疾病の早期発見、及び児童指導に活かした。	B
いじめへの対応	①児童支援専任を中心に組織として子ども一人ひとりを大切にした児童指導を進める。特に毎月職員会議内で定期的に子どもの情報の共有化を図る。 ②アンケートを活用しながら日頃の児童の見取りを十分にすることでいじめ等の未然防止に努める。	①職員会議で、児童の様子の共有を行うことができた。いじめ防止対策委員会を児童指導専任中心に実施した。必要な情報については、職員全体で共有した。②今年度は、学校再開スタートプログラム、いじめアンケート、YPのアンケート等を取り、児童の不安解消及び指導に活用した。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①メンターチームを6年以下の教職員を中心に組織する。全体の相談役に主幹教諭、様々な講師にはミドルリーダーがあたり月1回の活動を継続的に行う。 ②職員会議をペーパーレスで行い、事務の効率化を図る。 ③2週に1度教務会を行い、学校リーダーが全体を見通して学校運営に参画していく場を設定する。	①メンターチームを中心に、経験の浅い教職員が月1回の研修的な活動を行うことにより、授業の技量を向上させることができた。②「ミライム」を活用し、会議でのペーパーレスを一定の割合で実現した。③教務会や企画会を必要に応じて開催し、情報を共有しながら状況に合わせて知恵を出し合うことができた。	B
ブロック内評価後の気付き	・コロナウイルス感染症予防のため、小学校・中学校の小中合同授業研究会等は中止となったが、教務主任は教務会をもち、学校間の情報交換や相互理解の場をもった。 ・今年度より導入された「自分作りパスポート」については、教務会で形式や取り組みの内容等について確認した。また、各学校の担当者が、自分作りパスポートづくりを推進している能見台小学校の校長より研修を受け、共通理解をしたうえで各学校に取り組みを広げるようにした。 ・来年度以降も、令和元年度からのテーマにあるこども像をめざし、授業研究などを行っていく。		
学校関係者評価	・アンケートで肯定的な意見が80%前後あるので、学校経営が順調に進んでいると理解する。 ・「自分の命は自分で守る」という高い意識をもっている子どもたちが多いことに共感した。 ・感染症拡大防止のための毎日のアルコール消毒の徹底には頭が下がる。 ・コロナ禍の中、行事を工夫しながらいくつか行えたことに感心した。子どもたち、保護者、学校が協力したからこそ実現できたと思う。 ・登下校時のルールやマナーが気になる。挨拶も少ないが、家庭のやるべきことも多いと思う。		
中期取組目標振り返り	コロナ禍の中、目標に向けての取組が例年と比べ、困難だったが、制約された状況で、できる限りの取組を行った。生活科、社会科、生活単元の学習については、全国大会発表という機会を得たことで熱のこもった教材研究を続け、子どもたちの学ぶ姿勢の向上につなげることができた。自分たちで調べて解決していくスタイルが定着してきている。地域の方々との積極的なかかわりについても地元の方をゲストティーチャーに招いたり、取材に赴いたりすることで一定の成果は感じられた。まちの清掃活動については、この状況では難しく、ほぼ機会を設定することができず、次年度以降への課題となってしまっ		

重点取組分野	令和　3　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	○社会科・生活科を重点教科として取り上げ、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。①すべての子どもたちが互いに学び合う学習集団②討論などの対話的な学びの重視③問題解決的な学習の重視④学んだことの価値に気付くメタ認知力の育成⑤教科の枠を超えて学びを創る態度の育成	①どの学年でも重点的に学び合いの基礎を指導し、効果がみられた②社会科・生活科を中心に学び合う学習を行っていくことで問題をより深く追究していく子どもの姿がみられた。③学習問題を子どもたちの主体性を入れながらつくることで問題解決的に学習を展開した。④振り返りを重視していくことで自分の理解したことをより認識していく姿がみられた。⑤主体的・対話的な深い学びをどの教科においても意識しながら日々の授業に取り組み、子どもが主体的に学びをつくっていけるように学習を積み重ねた。	B
豊かな心	①全教育活動を通して、道徳教育の充実を図る。②たて割り集団活動での各学年のねらいの明確化や内容の充実を図り活動することで、主体性、思いやりの心を育てながら自己有用感を高める。③友達や地域とのつながりを大切にし、自ら進んであいさつができるようにする。	①各学年で学年暦を作成し、様々な教科・領域、学校行事に道徳教育を位置づけて計画、遂行することができた。②たて割り活動において、学年に応じたねらいを意識して指導し、子どもたちの自己有用感の向上につながった。③委員会を中心にあいさつ活動を実施した。	B
健やかな体	①西富タイムを各学級ごとに計画的に実施し、体力の向上を図る。 ②縄跳び週間などのスポーツ週間を通し、季節に応じた体力向上の取組を実施する。	①学級数の増加により、西富タイムで全ての学級が外遊びができない状況のため、計画的に体力の向上を図ることが難しかった。 ②今年度は、感染症対策のため、外遊びの推進活動を行った。感染症拡大や熱中症予防のため、恒常的な体力向上の取り組みとはならなかった。 　次年度以降は短縄週間など、密にならない工夫をして体力の向上を図っていける取り組みを行っていく予定である。	C
共感的理解	①授業の中で、異なる意見を認め合い、相手の良さを見つけることのできる関係性の育成②児童が自分の役割に責任と自覚をもって取り組むたてわり活動③児童がよりよい学校を目指して自ら活動計画を立て、実践できる児童会活動を行います。	①課題解決に向かって、話し手の思いや考えを受け止め、自分の考えを伝え、高め合う姿が定着しつつある。②活動のめあてに沿った遊びになるように工夫していた。集会に向けて各学年に応じためあてを立てて臨み、充実した活動になった。③児童会スローガン達成に向かって各委員会が年間計画を立てて活動を進めていた。活動時期に重なりが出てしまい、学級での取り組みが浅くなってしまうことがあり、来年度は時期が重ならないように、工夫していく予定である。	B
特別支援教育	①個別の支援計画・指導計画に基づき、子ども一人ひとりの状況に応じた支援体制・学習環境を作り継続的な指導を進める。	支援の必要な児童について個別の支援計画・指導計画を作成し、児童の状況など職員による共通理解を図った。また、支援体制・学習環境つくりの一つとして、「あおぞら教室」を設け、一人ひとりのニーズに合わせ取り出し指導をおこなった。	B
安全管理	①発達段階に応じた危機管理教室や防災・防犯訓練、交通安全教室等の体験活動を通して児童の危機管理能力を高める。	避難訓練では、様々な状況を想定し、訓練を行い、臨機応変に対応できる危機管理能力を高めようとした。交通安全教室では、安全な道路の歩き方を学び、防犯教室では、放課後の防犯について意識を高めた。5・6年生はインターネットでの個人情報の取り扱いや、SNSトラブルについて理解し、危機意識を高めた。	B
地域連携	①開かれた教育課程をめざし、まちと共に歩む学校づくり懇話会を中心として、新しく設定した教育目標を周知、連携の在り方を探る。②学校と地域との情報共有、理解を図る。③学校運営協議会の設立に向けた基盤づくりに取り組む。	全体的には、コロナ禍のため、十分満足いく内容ではなかった。2年以上ぶりに集合での「まち懇」を開催し、学校の取組の紹介や防犯に対する取組等の意見交換の場とすることができた。地域との繋がりは、防犯パトロールや公園愛護会の方をゲストに迎えるなど、直接的に行う場を設けることができた。学校運営協議会の設立準備は着々と進め、来年度初めに立ち上げる予定である。	C
保健管理	①学校保健委員会を中心として、児童自らが自分の体に関心をもち、よりよい生活をめざすための啓発活動②日常の保健学習の充実③日常の健康観察や疾病予防、児童の自己健康管理能力向上のための取組	今年度はさらに手洗いをした後にきれいなハンカチで拭くことをめざして取り組んだ。感染症が流行する中で児童たちの手洗いに対する意識が上がってきているように思える。日々の健康観察も電子化することにより家庭との連携が取りやすくなった。	B
いじめへの対応	①児童支援専任を中心に組織として子ども一人ひとりを大切にした児童指導を進める。特に毎月職員会議内で定期的に子どもの情報の共有化を図る。 ②アンケートを活用しながら日頃の児童の見取りを十分にすることでいじめ等の未然防止に努める。	①職員会議等で子どもの様子を共有した。毎月いじめ防止対策委員会を児童支援専任中心に実施した。必要な情報については、職員全体で共有した。②今年度は、学校再開スタートプログラム、いじめアンケート、Y-Pアンケート等を取り、子どもたちの不安解消及び指導に活用した。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①メンターチームを6年以下の教職員を中心に組織する。全体の相談役に主幹教諭、様々な講師にはミドルリーダーがあたり月1回の活動を継続的に行う。 ②職員会議をペーパーレスで行い、事務の効率化を図る。 ③2週に1度教務会を行い、学校リーダーが全体を見通して学校運営に参画していく場を設定する。	①月1回の研修や他の先生の授業見学を通して、授業技能や学級経営を向上することができた。 ②「ミライム」を活用し、会議でのペーパーレスを進めた。ロイロノートを活用し、児童への配付プリントを削減することができた。③教務会や企画会を必要に応じて開催し、週に1度の教務会を開催することで、課題に対して素早く対応することができた。	B
ブロック内評価後の気付き	・今年度もコロナウイルス感染症予防のため、小学校・中学校の小中合同授業研究会等は中止となったが、教務主任は教務会をもち、学校間の情報交換や相互理解の場をもった。 ・富中ブロックで、お互いの学校の様子を観察し、相互評価を行った。授業での児童の主体性や教師の掲示物に関して評価をいただいた。 ・来年度以降も、ブロックのテーマにあるこども像をめざし、授業研究などを行っていく。		
学校関係者評価	・スマホ、タブレットがいじめにつながらないか心配だが、携帯スマホ安全教室の実施はいじめ防止の一助となっており、ぜひ続けてほしい。 ・防災意識を高めるためにも、地域の防災訓練に児童が参加する意欲がもてるように、学校と地域が連携をしていくとよい。防災の授業で、地域の取組を積極的に扱う等が考えられる。 ・子どもたちが伝統行事、地域行事、一般常識等に疎い面が見られるが、家庭で伝えられていないことが多いことが一因ではないか。家庭の教育力が上がると、学校の教育もより効果的に行える。		
中期取組目標振り返り	昨年度に引き続きコロナ禍での教育活動となってしまったが、タブレット端末を活用した学習がある程度定着するなどピンチをチャンスとして活かせた面もあった。特に学び合いや自主的な調べ学習に大きな効果が見られた。授業参観や懇談会の数は少なかったが、2年ぶりに「まち懇」を開催し、生で教育活動の様子を伝えたり、それに対する地域の声を聞いたりすることで、開かれた学校を取り戻すことができた。児童指導については、各職員個々でなく、学年、専任といったチームで組織的に対応することを心がけたことで、豊かな心の育成やいじめの防止に一定の成果を上げることができた。		